アジア系留学生の対日態度及び 対異文化態度形成におけるエスニシティの役割⁵

山 崎 瑞 紀¹ 平 直 樹² 中 村 俊 哉³ 横 山 剛⁴

THE ROLE OF ETHNICITY IN THE DEVELOPMENT OF THE ASIAN STUDENTS' ATTITUDES TOWARD JAPANESE AND OTHER CULTURES

Mizuki YAMAZAKI, Naoki TAIRA, Shun-ya NAKAMURA AND Tsuyoshi YOKOYAMA

This study investigated the effects of various factors on the Asian students' attitudes toward Japanese people and other cultures. It has been reported that the visiting students' attitudes toward Japanese are significantly related to friendship with Japanese and discrimination. In this study, we approached the development of attitudes from the view of ethnicity. The following factors were examined: friendship with Japanese, favorable experiences concerning the students' ethnicity, unpleasant experiences concerning the students' ethnicity (discrimination), and respect of Japanese for the students' ethnicity. Four hundred and sixty-eight (468) Asian students attending universities in Japan responded to the questionnaire. The data obtained were examined by path-analysis. The results showed that friendship and favorable experiences contributed positively to attitudes toward the Japanese through the factor of respect for ethnicity. Unpleasant experiences had a direct negative effect on attitudes. Attitudes toward the Japanese were related significantly with attitudes toward people with other cultures. The importance of a host country's respect for the visiting students' ethnicity was discussed.

Key Words: ethnicity, ethnic identity, Asian, foreign students, attitudes toward Japan.

問 題

さまざまなエスニック・グループから構成される世

界のあらゆる国において、エスニシティに関わる問題はまさに社会の根底をも揺るがしかねない重要な問題として扱われてきている。アメリカにおいては「人種のるつぼ」モデルが失敗に終わり、現在ではモザイク・モデルに基づく社会制度が模索されている。長い間、白豪主義を掲げてきたオーストラリアにおいても多文化主義が主張され、あらゆる公的機関で多文化主義の実践がなされている。

日本は単一民族の国であると主張する者もいるが、在日韓国・朝鮮人やアイヌの人々の存在を忘れるべきではないだろう。さらに近年、いわゆるニューカマーと呼ばれる就学・就労を目的とする外国人が急増しており、日本社会も従来のやり方を見直すべき時期に

¹ 早稲田大学 (Faculty of Education, Waseda University)
現在の所属: 日本学術振興会特別研究員 (JSPS Research Fellow)

² 大学入試センター (The National Center for University Entrance Examinations)

³ 福岡教育大学 (Faculty of Education, Fukuoka University of Education)

⁴ 広島市立大学 (Faculty of International Studies, Hiroshima City University)

⁵ 本研究の一部は日本心理学会第59回大会において口頭発表した。

入っている。このようななかで、日本における異文化間接触に関する研究はますます必要性を増しているが、エスニシティの概念を取り上げて異文化間接触について検討した心理学的研究は依然として少ない。

「エスニシティ」という用語についてはさまざまな定義があり、研究者による用いられ方にも混乱がみられるが、その理由としては、「エスニック・グループを構成する特徴を定義しようとしても、すべてのグループに共通の根本的な特徴というものはない」(De Vos, 1975) ことが挙げられる。Isajiw (1974) は、主に社会学的研究にみられる「エスニシティ」の考察において、一般的な定義に特定のグループを焦点とした定義を加えた上で、エスニシティをとらえるべきであると主張している。ここでIsajiw (1974) は、エスニシティの一般的な定義を「同じ文化を共有する人々から成る不随意集団 (involuntary group)」とした上で、移民集団から構成される北アメリカの事例を考慮した再定義として「同じ文化を共有する人々から成る不随意集団、あるいはその子孫でその集団に属すと自分自身をアイデンティファイしたり、される人々」とエスニシティを記述している。

エスニシティの諸定義は、客観的 (外的) 基準を重視するものと主観的 (内的) 基準を重視するものに分類することができる。Isajiw (1974) によって分析された27のエスニシティの定義において、エスニック・グループの属性として多く挙げられていたものを順に示すと、①共通の祖先②同一文化・慣習③宗教④人種あるいは形質上の特徴⑤言語⑥我々感情、であった。上位6の属性のうち内的基準と考えられるのは⑥のみであり、それ以外はすべて外的基準となっている。外的基準を重視する者にとってのエスニシティとは、a) 文化的內容 (言語、宗教、ピルーフ、エンブレム、慣習、価値観、規範)、b) 領土に関する内容 (国籍、地方、国)、c) 生物学的内容 (親族、子孫、人種、種族) のどれか、あるいはその組合わせであることが多い(Burgess, 1978)。これに対して、内的基準を重視する者は、エスニシティの社会心理学的な側面や情緒的なきずなを強調し、本人のアイデンティティや所属意識、他者による規定がエスニシティを形成すると考える。エスニシティについて、例えばBrass (1976) は「アイデンティフィケーションの一形態」、Patterson (1975) は「所属の意識的な感覚」と述べている。エスニシティの内的基準を重視する者としては他に、Glazer & Moynihan (1963), Shibutani & Kwan (1965), Barth (1969) 等が挙げられる。特にBarth (1969) はエスニシティの構成要素として、自己による

アイデンティフィケーションだけでなく他者によるアイデンティフィケーションをも強調している点で重要である。

外的基準を重視するエスニシティの定義は、集団間の移動が物理的にも心理的 (国際結婚によって生まれた子どものエスニック・アイデンティティなど) にもほとんどみられない古典的なエスニック・グループを考える際には特に問題ないが、移民集団の子孫が独自の文化をほとんど失ってもなおアイデンティフィケーションによって集団を形成している現代の状況を、外的基準のみを強調する立場では説明することができない。とはいえ、内的基準のみを重視すると、エスニシティの概念を過度に拡張することになる。したがって現在では、前述したIsajiw (1974) の定義のように、両基準を採用した統合的定義を行うことが一般的である。De Vos (1975) も統合的立場をとり、エスニック・グループを「接触する他者とは共有しない伝統を共通にもつ人々から成る自覚のある集団」、エスニシティを「所属における継続の主観的な感覚」と定義している。De Vosによれば、最も狭義のエスニシティは過去からの継続感であり、これは自己定義の本質的な部分として維持される感覚である。自己の所属する集団や血族が消滅の危機にさらされると、自己の消滅の危機と感じる。それゆえ、エスニシティは集団の歴史的継続性において、個人の生存 (サバイバル) の感覚が含まれるのである。van den Berghe (1976) もまた、エスニック・グループを「文化の伝統を共有し、他の集団と異なるという意識がある程度もっている集団」と定義している。またObidinski (1978) は、ポーランド系アメリカ人のエスニシティの強さを測定する方法を探るなかでエスニシティの操作的定義を行っているが、それらは①文化遺産 (起源や伝統の共有) ②共通の適応 (同一の歴史経験) ③選択的知覚 (集団へのアイデンティティ) の要素から成り立っており、統合的立場をとっていることがわかる。わが国においては、綾部 (1985) が同じ統合的立場から、エスニック・グループを「国民国家の枠組みのなかで、他の同種の集団との相互行為的状況下に、出自と文化的アイデンティティを共有している人々による集団」、エスニシティを「エスニック・グループが表出する性格の総体」と定義している。本研究においても、外的、内的の両基準を採用し、エスニシティを「個人の所属感を含む文化・領土・生物学的要素の総体」と定義する。成員の所属感なしには、集団の維持は困難であるし、文化・領土・生物学的要素のうち、いずれの領域を重要とするかは、集団によって異なると考えるためである。た

だし、ここでいう「生物学的要素」は必ずしも現実を反映したものとは限らない。集団成員による思い込みを含む。集団間で「生物学的に異なる」と認識している場合でも、それは単なる「思い込み」である可能性が存在するからである。

日本におけるエスニシティ研究は、在日外国人のなかで最大の定住集団である在日韓国・朝鮮人を対象とするものが多い(金, 1994; 中島, 1994; 平・川本・慎・中村, 1995など)。だが冒頭で述べたように、就学・就労を目的として新たに来日する外国人が増加している。1994年12月末現在、日本に滞在している留学生数は61,515人、就学生数は37,653人であり、それぞれ90%以上がアジア出身者である(入管協会, 1995)。「留学」の資格で新規入国した者の出身国内訳をみると1988年以降中国大陆からの来日者が目立って多く、1988年以前のアジア系留学生の出身国内訳が台湾32.7%、韓国27.2%、中国15.5%(1984年現在; 法務省, 1985)であるのに対し、1994年現在、中国35.1%、韓国30.2%、台湾12.4%(法務省, 1995)となっている。留学生は、定住外国人である在日韓国・朝鮮人に比べると短期の滞在者といえるが、自文化と異なる文化に接することにより、エスニシティの要素が意識のなかで顕在化している(salient)と考えられる。また、最近では学業を修めた後も企業に就職し日本に留まるケースが多くなってきている(佐々木, 1991; 法務省入国管理局, 1992; 朝日新聞, 1994)。したがってこれまであまり対象とされてこなかった留学生についても、エスニシティの視点をを用いてアプローチする必要があると思われる。

在日外国人の滞在国内に対する意識・態度に関する心理学的研究としては、欧米系・アジア系留学生を対象とした岩男・萩原(1987, 1988)、川野(1982)、外国人研修所の欧米系・アジア系滞在者を対象に日本・日本人イメージ及び日本人との社会的距離を測定した大山(1990)、アジア系留学生を対象に主に留学観についての調査を行った阿部・稲葉(1975, 1976)、帰国した韓国人留学生を対象に同じく留学観について調査をした阿部・清水・馬越・黒岩・稲葉(1978)が挙げられる。なかでも岩男・萩原(1988)はSD(Semantic Differential)法を用いて対日イメージを測定した後、因子分析を行い、「親和性(Sociability)」「勤勉性(Diligence)」「信頼性(Reliability)」「先進性(Modernity)」の4因子を抽出している。そのうち「親和性」と「信頼性」においては滞在4年以下のアジア系留学生の場合、滞在期間の長い者ほどイメージが悪い傾向のあるほか、日本語能力の高い者ほど「親和性」の評価が厳しくなる傾向のあ

ること、全体としてアジア系留学生の方が欧米系留学生よりも対日イメージの悪いこと、が指摘されている。山崎(1993, 1994)は、ここで抽出された「親和性」と「信頼性」因子に含まれた項目をもとに、アジア系留学生及び就学生の対日イメージを測定し、対日イメージに影響する要因を探った。その結果、日本人に対する親和的イメージには、日本人による被差別感と日本人との友人関係の豊かさの2要因が特に関係していることが認められた。

対日態度研究には他に、中村・慎・平・川本・横山・高田(1994)が挙げられる。中村らは在日朝鮮人中学生を対象に質問紙調査を行い、日本人の親友の存在、及び「良い」接触体験が日本人との交流意図や異文化交流志向と関連のあることを報告している。ここで、「良い」思いをした体験にはエスニシティを肯定的に受け入れられた体験(チマ・チョゴリをほめられた、など)が含まれており、エスニシティの尊重が異なる集団間の友好関係の成立に寄与することが示唆されている。

仮 説 設 定

アジア系留学生・就学生の対日態度に「日本人による被差別感」及び「日本人との友人関係の豊かさ」の要因が関連しているという研究結果(山崎, 1993; 1994)と在日朝鮮人中学生の対日態度に「日本人の親友の存在」及び「日本人との良い接触体験」が関連しているという研究結果(中村ら, 1994)は、どちらも日本人との友人関係と交流の質が対日態度に影響を及ぼしていることを示唆する点で共通している。中村らの「良い接触体験」を自分のエスニシティを肯定的に受け入れられた経験と解釈し、山崎の「被差別」経験を自分のエスニシティを否定的に評価された経験と解釈するならば、エスニシティに関する肯定的・否定的経験が友人関係の要因とともに、対日態度に影響を与えていると考えることができる。その場合、エスニシティに関する経験が直接、対日態度に影響を及ぼすと考えるよりは、「エスニシティに対する好意の認知」の要因を通して対日態度に影響すると考えた方が自然である。すなわち、エスニシティに関わる経験を通して、留学生はマジョリティである日本人が自分のエスニシティを尊重しようとしているか、関心や好意をもっているかを推測し、そうした推測が対日態度に影響することが考えられる。とはいえ、親しい日本人と一般の日本人では、自エスニシティに対する関心や好意が異なると留学生が判断する可能性があるため、「自エスニシティに対して親しい日本人がどのくらい関心・好意をもって

いると思うか」,「自エスニシティに対して一般の日本人がどのくらい関心・好意をもっていると思うか」の2つの要因を,エスニシティに関する経験と対日・対異文化態度の間に介在させることにする。以上のモデルをパス・ダイアグラムを用いて表現したものがFIGURE 1である。本研究では,このモデルをもとに質問紙調査を実施し,パス解析を用いて,エスニシティからみた留学生の対日・対異文化態度形成の過程を探ることとする。

FIGURE 1 対日・対異文化態度形成の予測因果モデル

方 法

被調査者 全国(北海道1校,新潟県1校,千葉県1校,埼玉県1校,東京都3校,神奈川県1校,愛知県2校,大阪府2校,京都府1校,奈良県1校,兵庫県1校,広島県1校,福岡県2校の計18校)の大学に通うアジア出身の留学生468名(男性283名,女性182名,不明3名)。日本における滞在期間の平均値は33.5カ月($SD=19.9$),平均年齢は29.0歳($SD=5.2$)であった。出身国は中華人民共和国224名(47.9%),韓国67名(14.3%),台湾38名(8.1%),マレーシア26名(5.6%),タイ25名(5.3%),インドネシア24名(5.1%)などの計19カ国であった。

質問紙構成 分析に使用した質問項目は計59項目であり,内容は以下の通りである。8)の日本人イメージについては,岩男・萩原(1988)の留学生の対日イメージ調査において抽出された親和性因子と信頼性因子を構成する項目のうち,因子負荷量の高いものを選択して用いた。それ以外の項目については,山崎(1993, 1994)を参考にしつつ,本調査のために新たに作成した。1), 2)は記述式, 4)は4段階, 8)は7段階, それ以外の質問項目は5段階評定で回答を求めた。2)の民族的立場については,「自分の民族的立場(民族的アイデンティティ)をあなた自身の言葉で教えてください」とし,一連の質問項目の最後に自由記述で回答を求めた。質問紙は,まず日本語で作成した後,バックトランスレーション法を用いて中国語,ハングル,英語版を作成した。すなわち,各言語と日本語の2言語に堪

能な者2名のうち1名が日本語から各言語に訳した後,それを別の者1名が再び日本語に訳し,訳文もとの日本語に内容のずれがないか,チェックを行った。評定法で回答を求めた各項目の具体的内容は, TABLE 1に示されている。

- 1) 国籍, 性別, 滞日期間, 年齢
- 2) 民族的立場
- 3) 日本人との友人関係の豊かさ

TABLE 1-1 因子分析結果と各項目における平均値及び標準偏差

項 目	第1因子	第2因子	平均	SD
3) (日本人との友人関係の豊かさ($\alpha=.87$))(1~5点)				
X3 よく一緒に遊びに行く日本人の友人がいる	.783		3.36	1.41
X2 よく一緒に食事をする日本人の友人がいる	.750		3.63	1.36
X6 個人的な悩み事を相談できる日本人の友人がいる	.709		3.19	1.52
X4 日本語についてアドバイスしてくれる日本人の友人がいる	.666		3.97	1.22
X8 日本人との友人関係に満足している	.662		3.48	1.37
X5 勉強のことで力になってくれる日本人の友人がいる	.644		3.66	1.35
X1 日常生活でわからないことを聞ける日本人の友人がいる	.640		4.46	0.88
X7 帰国してもつきあっていたい日本人の友人がいる	.543		4.31	1.03
4) 自エスニシティに関わる経験				
(自エスニシティに関わる肯定的経験($\alpha=.75$))(1~4点)				
X12 民族の芸術を日本人にほめられた	.757	.016	2.60	0.89
X10 自分の民族の有名な人について日本人にほめられた	.681	.099	2.46	1.00
X8 自分の民族の文化や習慣の話題で日本人と楽しい会話をした	.666	-.087	2.95	0.86
X6 民族料理を日本人においしいと言われた	.546	.092	3.42	0.86
X4 民族衣装を日本人にほめられた	.539	-.072	2.20	1.11
X2 母語ができることでよい思いをした	.342	.237	2.53	1.09
(自エスニシティに関わる否定的経験($\alpha=.69$))(1~4点)				
X9 外国人であるために学校やアルバイト先で意地悪をされた	.049	.693	1.69	0.90
X7 外国人であることを理由にアルバイトの賃金を低くされた	.049	.653	1.62	0.98
X1 自分の民族のことをけなされた	-.030	.504	2.01	0.86
X5 外国人であることを理由にアパートを借りることを断られた	-.068	.486	1.82	1.08
X13 自分の民族の習慣に従って行動し,日本人とトラブルになった	.043	.475	1.85	0.87
X3 母語を話していて,日本人にじろろ見られて嫌だった	.118	.443	2.12	1.08
X11 ことばや習慣をよく理解できないため,お金をだましとられた	.027	.330	1.20	0.49
5) (親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知($\alpha=.84$))(1~5点)				
X3 私の民族の歴史を持っている	.763		3.58	1.19
X1 私の民族の伝統や芸術に関心を持っている	.709		3.80	1.03
X2 私の民族の習慣をよく理解し,尊重してくれる	.671		3.43	1.09
X6 私の民族に対して好意的な感情を抱いている	.664		3.79	0.95
X4 私の民族の政治的・経済的状況に関心を持っている	.653		3.66	1.12
X9 私の民族の将来に関心を持ち,期待している	.596		3.51	1.10
X5 私の国(出身地)に1度は行ってみたいだろう	.553		4.31	0.81
X7 私の民族に対して優越感を持っている	-.012		3.23	1.09
X8 私の民族に対して劣等感を持っている	-.034		2.24	0.96

*) X: 項目分析結果に基づき,尺度に含めなかった項目

- 4) 自エスニシティに関わる経験
- 5) 親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知
- 6) 一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知
- 7) 日本人との交流意図
- 8) 日本人イメージ
- 9) 異文化との交流意図

なお、この他に、尺度やモデルには含まないが、来

TABLE 1-2 因子分析結果と各項目における平均値及び標準偏差

項 目	第1因子	第2因子	平均	SD
6) [一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知($\alpha=.84$)] (1～5点)				
X3 私の民族の歴史に関心を持っている	.815		3.09	1.17
X4 私の民族の政治的・経済的状况に関心を持っている	.689		3.29	1.09
X1 私の民族の伝統や芸術に関心を持っている	.663		3.22	1.07
X2 私の民族の習慣をよく理解し、尊重してくれる	.659		2.74	1.02
X9 私の民族の将来に関心を持ち、期待している	.632		3.08	1.05
X6 私の民族に対して好意的な感情を抱いている	.630		3.19	0.93
X5 私の国(出身地)に1度は行ってみたいだろう	.533		3.66	1.00
×X8 私の民族に対して劣等感を持っている	.150		2.26	0.96
×X7 私の民族に対して優越感を持っている	-.001		3.34	1.06
7) [日本人との交流意図($\alpha=.82$)] (1～5点)				
X1 日本人ともっと深くつきあいたい	.795		4.51	0.79
X2 日本人の友人がたくさん欲しい	.758		4.37	0.91
X5 帰国しても、何らかの形で日本との関係を保ちたい	.724		4.57	0.67
X6 自分の民族と日本人とのかけ橋になりたい	.694		4.51	0.76
X3 日本の文化をもっとよく知りたい	.611		4.59	0.74
X4 仕事のパートナーとして日本人を選びたい	.475		3.88	1.14
8) 日本人イメージ				
[親和性イメージ($\alpha=.82$)] (1～7点)				
X1 親しみやすいー親みにくい	.803	-.010	4.29	1.67
X2 あたたかいーつめたい	.778	.036	4.39	1.60
X3 つきあいやすいーつきあにくい	.735	.004	4.05	1.56
×X4 親切だー不親切だ	.412	.352	5.27	1.30
[信頼性イメージ($\alpha=.75$)] (1～7点)				
X5 信頼できるー信頼できない	-.009	.853	4.96	1.41
X6 正直だー不正直だ	.022	.717	4.90	1.50
9) [異文化との交流意図($\alpha=.78$)] (1～5点)				
X2 異なる民族の友人がたくさん欲しい	.839		4.57	0.66
X1 異なる民族の人々とともに深くつきあいたい	.770		4.63	0.61
X3 他の民族の文化をもっとよく知りたい	.727		4.61	0.62
X5 将来、自分の子どもには色々な民族の人々と交流させたい	.595		4.23	0.96
X4 将来、自分の子どもは色々な民族のいる学校に入りたい	.482		3.77	1.17

^{a)} ×: 項目分析結果に基づき、尺度に含めなかった項目

日してからの異文化交流意図の変化に関する3項目を用いた。

調査時期・手続 1994年10月から1995年5月⁶⁾にかけて実施した。調査用紙の配布は大学の留学生担当部を通して行い、無記名式で回収した。

分析方法 調査結果の分析は2段階を経て行う。まず最初に、アジア系留学生の対日・対異文化態度、及びそれらを規定していると想定される諸要因を測定する尺度を作成する。次に、作成された尺度を用いて対日・対異文化態度、及びそれらの規定要因を測定した後、設定されたモデルをもとにパス解析を行い対日・対異文化態度形成過程を探った上で、アジア系留学生の対日・対異文化態度におけるエスニシティの役割について検討する。

結 果

民族的立場について 民族的立場(民族的アイデンティティ)への回答としては、大陸出身者の場合、「中国人、漢民族、中華民族、中国大陸人、大陸人、華人、華僑、中国のモンゴル人、一般東洋人、普通の中国留学生、在中国的朝鮮族、上海人」、台湾出身者の場合においては「台湾人、漢民族の台湾人、中国台湾人、中華民族、抑圧された民族歴史をもつアジア人」、韓国出身者の場合、「韓国人、韓民族、韓人、コリアン」といった記述がみられた。他に「タイ人、マレーシア人、インドネシアン、ジャワニーズ、ジャワニーズスマトラン、中国系マレーシア人、アーリア系スリランカ人、パングラディシュのムスリム、アジア人、地球人」などの回答がみられた。

尺度構成 アジア系留学生の対日・対異文化態度、及びそれらを規定すると考えられる諸要因を測定する尺度を作成するため、3)～9)の各項目群について主成分分析を行い因子数を検討した後、尺度項目の選定を行った。その際、3), 5)～7), 9)の各回答については“そう思う”を5点、“そう思わない”を1点として、4)については“よくある”を4点、“まったくない”を1点として、8)については肯定的イメージを7点、否定的イメージを1点として得点化した。主成分分析の結果得られた固有値のスクリー図から因子数を検討したところ、3), 5)～7), 9)については1次元構造が確認されたが、4)と8)については2次元の構造であることが示唆された。したがって、

⁶⁾ 関西地区の5校はいずれも1994年中に調査を終えており、本研究の調査結果に阪神大震災の影響はない。

後者の2つの項目群のうち4)については初期解を主成分解とした直交バリマックス回転を、8)については因子間の相関が高いことが想定されることから斜交プロマックス回転を行う方法で因子分析を行い、それぞれ2因子を抽出した。これらの結果を示したものがTABLE 1である。各項目の平均値及び標準偏差も同時に示す。3), 7), 9)はすべての項目の第一主成分への負荷量が高く、いずれも尺度として機能していた。5), 6)はいずれもX7, X8(優越感と劣等感)の負荷量が低いため不良項目と判断し、尺度から外した。各尺度とも項目の合計得点を尺度得点とし、それぞれ値が高いほど、日本人との友人関係が豊かである、親しい日本人や一般の日本人は自分のエスニシティに対し関心・好意をもっていると感じている、日本人との交流意図が高い、異文化との交流意図が高いことを示している。4) 自エスニシティに関わる経験においては2因子が抽出され、第1因子に高い負荷量をもつ項目は民族の芸術・習慣・料理・衣装・有名人などに関する肯定的経験を示すもの、第2因子に高い負荷量をもつ項目は外国人であることによる嫌な経験を示すものであった。したがって、第1因子は「自エスニシティに関する肯定的経験」因子、第2因子は「自エスニシティに関する否定的経験」因子と解釈した。第1因子において負荷量の高い5項目を「自エスニシティに関する肯定的経験」の尺度、第2因子において負荷量の高い7項目を「自エスニシティに関する否定的経験」の尺度とし、各項目の合計得点を尺度得点とした。得点の高い回答者ほど多くの経験をしていることを意味している。尺度選定の際、X2(母語ができることで良い思いをした)は両因子に高い負荷量を有しているため尺度から除くこととした。次に8) 日本人イメージにおいても2因子が抽出されたため、各因子に高い因子負荷量をもつ項目から判断し、第1因子を「親和性イメージ」、第2因子を「信頼性イメージ」の因子と解釈した。これらは岩男・萩原(1988)の結果と一致するものである。第1因子において負荷量の高い3項目を「親和性イメージ」の尺度、第2因子において負荷量の高い2項目を「信頼性イメージ」の尺度とし、各項目の合計得点を尺度得点とした。得点の高い回答者ほど日本人イメージが好意的であることを示している。X4(親切だー不親切だ)は両因子において高い負荷量を示しているため、尺度としては用いないことにした。以上の手続によって得られた「親和性イメージ」、「信頼性イメージ」、「日本人との交流意図」の各尺度によって留学生の対日態度を、「異文化との交流意図」尺度によって対

異文化態度を測ることにする。

各尺度におけるクロンバックの α 信頼性係数はTABLE 1に示したように、.69~.87の値をとっており各尺度とも十分な信頼性を有していた。また、各尺度得点の平均値、標準偏差及び尺度間相関を示したものがTABLE 2である。尺度得点の平均値をみると、本調査において対象としたアジア系留学生は、日本人及び異文化との交流意図が高いほか、日本人に対する信頼性イメージが比較的高く、自エスニシティに関する否定的経験が比較的少ないと回答していることがわかる。次に各尺度得点間の相関をみると、「肯定的経験」尺度と「否定的経験」尺度の相関が.04であり両尺度は独立したものであること、「親和性イメージ」尺度と「信頼性イメージ」尺度の相関は.43($p<.0001$)であり両尺度は相対的に独立する内容ではあるものの無関連ではないことが示唆されている。「日本人との交流意図」と両イメージの相関はそれぞれ.30($p<.0001$), .37($p<.0001$)であった。

対日・対異文化態度形成因果モデル FIGURE 1に示した単方向の因果モデルを仮定してパス解析を行った。パス解析に用いた指標は、日本人との友人関係、肯定的なエスニシティ経験、否定的なエスニシティ経験、親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知、一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知、日本人との交流意図、日本人に対する親和性イメージ、日本人に対する信頼性イメージ、異文化との交流意図の計9である。パス係数の推定には重回帰分析を用いた。親しい日本人・一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知は友人関係、肯定的経験、否定的経験を説明変数として、対日態度(日本人との交流意図、親和性イメージ、信頼性イメージ)は友人関係、肯定的経験、否定的経験、親しい日本人・一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認

TABLE 2 尺度間相関と平均値、標準偏差

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	平均	SD	得点範囲
1. 友人関係	1.00								30.14	7.37	8~40
2. 肯定的経験	.42	1.00							13.68	3.34	5~20
3. 否定的経験	-.08	.04	1.00						12.36	3.83	7~28
4. 親しい日本人	.30	.46	-.02	1.00					26.06	5.24	7~35
5. 一般の日本人	.23	.39	-.05	.54	1.00				22.16	5.24	7~35
6. 日本人交流意図	.25	.31	-.07	.36	.22	1.00			26.43	3.68	6~30
7. 親和性イメージ	.24	.20	-.29	.24	.29	.30	1.00		12.73	4.14	3~21
8. 信頼性イメージ	.12	.14	-.26	.17	.14	.37	.43	1.00	9.86	2.61	2~14
9. 異文化交流意図	.16	.18	.07	.12	.12	.44	.04	.06	21.81	3.04	5~25

知を説明変数として、異文化との交流意図は友人関係、肯定的経験、否定的経験、親しい日本人・一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知、対日態度（交流意図、親和性イメージ、信頼性イメージ）を説明変数として、重回帰分析を行った。この結果に基づき、パス係数（標準偏回帰係数）の値が5%水準の両側検定で有意であったパスを示したものが、FIGURE 2のパス・ダイアグラムである。

FIGURE 2において1%水準で有意であったパスに着目すると、「親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」、「一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」の2変数に対して「肯定的経験」から正のパス（.41, $p<.001$; .36, $p<.001$ ）がみられた。対日態度については、「日本人との交流意図」に対して「親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」から正のパス（.26, $p<.001$ ）が、「親和性イメージ」に対して「一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」より正のパス（.18, $p<.01$ ）及び「否定的経験」より負のパス（-.28, $p<.001$ ）が認められた。また「信頼性イメージ」に対して「否定的経験」より負のパス（-.27, $p<.001$ ）が認められた。さらに、「異文化交流意図」は「日本人との交流意図」から正のパス（.50, $p<.001$ ）がみられた。

各尺度得点における性・出身国による違い まず性別によって尺度得点に差があるかを調べるため、男性

と女性の平均値の差の検定(t検定)を行った結果、「肯定的経験」($t=-5.59$, $df=436$, $p<.0001$)においてのみ有意差がみられ、女性の方が高かった。次に出身国による差を検討するため、被調査者の多かった中華人民共和国、韓国、台湾について3カ国間の平均値の差の検定(一元配置の分散分析)を行った。その結果、「親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」($F(2,312)=22.76$, $p<.0001$)、「一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」($F(2,303)=21.99$, $p<.0001$)、「肯定的経験」($F(2,312)=5.40$, $p<.01$)、「否定的経験」($F(2,288)=8.75$, $p<.001$)において有意差が認められた。Tukeyの多重比較の結果、5%水準で、中国大陸出身者が他の2カ国に比べ「親しい日本人」「一般の日本人」とも自分のエスニシティに高い好意・関心をもっていると認識していた。また、「肯定的経験」も中国大陸出身者が韓国出身者に比べ有意に多かった。「否定的経験」は韓国出身者が他の2カ国に比べ有意に少なかった。

考 察

(1)留学生のエスニック・アイデンティティについて

回答者の民族的立場(民族的アイデンティティ)を回答者自身の言葉で表現してもらった結果、さまざまな回答がよせられた。それらは主に国籍・言語・地域(島)・宗教・人種の視点からの表現となっていたが、それぞれの重要性の程度は回答者によって異なり、多様なア

FIGURE 2 パス・ダイアグラム

アイデンティティを留学生がもっていることがわかる。個人レベルでのエスニック・アイデンティティのあり方がこれほど多様であるからこそ、「エスニック・アイデンティティ」や「エスニシティ」といった語が曖昧に使用され混乱を招いたともいえる。用語の定義を一元化することが事実上不可能であるとしても、心理学の立場として個人のアイデンティティの所在との関連から、「エスニシティ」という概念の性質を理解し、用いられる語の定義を明確にしていかなければならない。そのためには今後、人々が自ら選択するエスニック・カテゴリーの様相、その状況について検討していく必要がある。

本研究においては、主にエスニシティに関心の対象としたが、人によって状況によって、エスニシティに対する意識の強さは変化しうる (Okamura, 1981)。すなわち、状況によって、階級・職業・性別・パーソナリティといった他の属性はエスニシティをしのぐ影響を当然もちうるし、本研究の「民族的立場」で非常に少数ではあるが「地球人」といった回答をした者がいたことは、エスニシティの要素をアイデンティティとしてあえてもたないようにしている者の存在を示している。とはいえ、近代型の産業社会の発展とともにエスニシティは消えていくはずだ、とする機能主義者の予測は外れ、エスニシティ復興の現象がみられて久しい。自分を規定する性別やエスニシティといったものから解放されて生きることを理想とする考え方もあるが、現状では依然として困難であることを考えれば、エスニシティの概念は個人間の交流においてもまた無視できない要素といえるだろう。

(2) アジア系留学生の対日・対異文化態度形成因果モデルについて

全体として、日本人との友人関係や自分達のエスニシティを肯定的に受けとめられた経験は、自エスニシティに対して日本人がどれほどの関心・好意をもっているかという留学生の認知に影響し、そうした認知が対日態度、さらには対異文化態度にも影響するという関係が示された。一方、自エスニシティを否定的に評価された経験は、好意の認知の要因を通らず直接に親和性・信頼性イメージに負の影響を及ぼしていた。アジア出身の就学生を対象とした調査においては、否定的経験から一般の日本人による好意の認知に対し負のパスがみられているが (平・山崎・中村・横山, 1995)、アジア系留学生は就学生と異なり、否定的経験を「日本人でないことによる差別」として認識し、自エスニシティに対する日本人側の好意の欠如としては認識していな

いことが示唆されている。さらに対異文化態度は日本人との交流意図と強い関係がみられ、日本での経験が留学生の異文化への態度にも間接的にはあるが影響を及ぼしていることが示唆された。このことは、結果の項では記さなかったが、モデルの分析には用いていない補足的な質問項目に対する回答結果によっても伺える。すなわち、「日本に来てから、他の民族の人々への関心が深まった」「日本人との交流を通じて、他の民族の人々への関心が深まった」「留学生同士の交流を通じて、他の民族の人々への関心が深まった」という項目においてそれぞれ80.6%, 67.2%, 84.3%の者が「どちらかといえばそう思う」及び「そう思う」に回答しており、これらの結果からも日本への留学の経験と異文化態度との間に関係があることが示唆されている。

また、「親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」→「日本人との交流意図」、「一般の日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」→「日本人イメージ」へのパスは、日本及び日本人とさらにつきあっていきたいという気持ちが親しい日本人に対する意識と強く結びついている一方、日本人イメージは一般の日本人に対する意識と強く関係していることを示しており、対日態度における各側面の性質の違いが表われている。

「友人関係」→「親しい日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知」のパス係数が5%水準で有意ではあるものの比較的小さい値となっているが、これは友人関係と肯定的経験の間にある程度の相関がみられることによるものと考えられる。これらの要因間の相関は、日本人との友人関係が豊かであるほど自分のエスニシティを肯定的に受け入れられる経験も多いことを示しており、肯定的な経験は主に友人関係のなかでなされることを示唆しているかもしれない。

(3) 先行研究との比較検討

本調査結果から、自エスニシティに関する肯定的経験及び否定的経験は、日本人との友人関係と同様、対日・対異文化態度を形成する重要な要因であることが確認された。アジア出身の在日外国人学生を対象とするこれまでの研究 (山崎, 1993; 1994; 1996) においては、差別経験と日本人との友人関係の豊かさの2要因が対日態度に影響する要因と考えられてきた。これを踏まえて、本研究においては、両要因をエスニシティの視点からとらえ直す試みを行った結果、否定的経験においては自分のエスニシティに対する日本人の好意・関心を推定し、それを対日態度に反映させるという過程がみられなかったものの、肯定的経験においてはそうし

た過程の存在が示唆された。このことから、エスニシティの概念を用いてアジア系留学生の対日・対異文化態度を考えることの有効性が示唆されているといえる。

肯定的なエスニシティ経験の対日態度への影響は、定住外国人である在日朝鮮人中学生(中村ら, 1994)に続いて、比較的短期の滞在者であるアジア系留学生においても認められたことから、日本という滞在国内に対する態度の形成においてエスニシティが一定の役割を果たしていることが示唆された。歴史が示すように、実際には自民族以外のエスニシティを尊重することは容易なことではない。だが、民族集団間の交流が活発になった現代社会において、ホストカントリー側が自分達のやり方だけをよしとしようとするれば、在日外国人と日本人の友好的関係を築くことは難しい。本研究で使用了「エスニシティの肯定的経験」尺度の項目が示すように、まずは「料理」といった極めて限定された文化的側面からでもよいから、ホスト側の人々も積極的に他集団のエスニシティに関心をもつことが大切といえる。地域のイベントや学園祭などで最近よくみかける在日外国人による模擬店等はその意味で必ずしも無意味なものとはいえない。また、小・中学校のような比較的早い時期から、欧米文化のみに偏らない多文化への関心を芽生えさせるような教育の試みも考えていく必要があろう。

(4)今後の課題

本研究においては民族的背景が多様なアジア系留学生を調査対象としたため、エスニシティに関わる経験、特に否定的経験を尋ねる際に特定のエスニシティを念頭においた具体的な経験についての項目を設定することができなかった。そのため、否定的経験尺度において、民族性を積極的に否定されたというよりは外国人であることによる差別を尋ねる項目が多くなっている。また、出身国によってエスニシティに関する要因の値が異なる可能性が示唆されたことから、今後は調査対象を絞って質問項目を設定し研究を進めていく必要があるかもしれない。

また質問紙調査と併せて、来日前後の具体的な経験やエスニシティ、母国(人)、滞在国内(人)への意識等について綿密な聞き取り調査を行うことにより、留学生・就学生の対日態度及びその形成過程についての詳細かつ包括的な理解を目指すことも今後の課題である。

引用文献

阿部 洋・稲葉継雄 1975 日本におけるアジア人留学生の意識 IDE—現代の高等教育 民主教育協

会 No. 163, 19—26.

阿部 洋・稲葉継雄 1976 アジア人留学生の日本留学観—アジア人留学生意識調査の分析を通してみて 国立教育研究所紀要, 89, 149—252.

阿部 洋・清水慶秀・馬越 徹・黒岩晰子・稲葉継雄 1978 日本留学帰国者の意識とその活動—韓国におけるアンケート調査の分析結果 国立教育研究所紀要, 94, 263—328.

朝日新聞 1994 はたらく現場で—ニッポンの会社 (1)— 1994.11.29付朝刊

綾部恒雄 1985 エスニシティの概念と定義 文化人類学, 1(2), 8—19.

Barth, F. 1969 *Ethnic groups and boundaries*. Boston: Little, Brown.

Brass, P.R. 1976 Ethnicity and nationality formation, *Ethnicity*, 3, 225—241.

Burgess, M.E. 1978 The resurgence of ethnicity: myth or reality? *Ethnic and Racial Studies*, 1, 265—285.

De Vos, G. 1975 Ethnic pluralism: conflict and accommodation. In G. De Vos & L. Romanucci-Ross (Eds.), *Ethnic identity-cultural continuities and change*. The University of Chicago Press. Pp. 5—41.

Glazer, N., & Moynihan, D.P. 1963 *Beyond the melting pot*. Cambridge: M.I.T. Press.

法務省 1985 第24出入国管理統計年報 昭和60年版

法務省 1995 第34出入国管理統計年報 平成7年版

法務省入国管理局 1992 平成3年における留学生の日本企業等への就職 国際人流, 65, 36—42.

Isajiw, W.W. 1974 Definitions of ethnicity, *Ethnicity*, 1, 111—124.

岩男寿美子・萩原 滋 1987 留学生が見た日本—10年目の魅力と批判— サイマル出版会

岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析 劉草書房

川野重任 1982 在日外国人留学生—その日本観— 大明堂

金 明秀 1994 民族的求心力の形成論—LISRELを用いた因果構造分析— 大阪大学人間科学部年報 人間科学, 15, 19—34.

中島智子 1994 在日韓国・朝鮮人のエスニシティと教育—「文化的志向性」と「社会的志向性」の視点から— 教育学研究, 61, 233—241.

中村俊哉・慎 栄根・平 直樹・川本ひとみ・横山恭

- 子・高田夏子 1994 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験 教育心理学研究, **42**, 291—297.
- 入管協会 1995 在留外国人統計 平成7年版
- Obidinski, E. 1978 Methodological considerations in the definition of ethnicity, *Ethnicity*, **5**, 213—228.
- Okamura, J.Y. 1981 Situational ethnicity, *Ethnic and Racial Studies*, **4**, 452—465.
- 大山七穂 1990 日本・日本人のイメージ研究 立脇和夫・中西輝政(編) 国際社会と国際協力(国際関係学双書6) 北樹出版 Pp. 41—97.
- Patterson, O. 1975 Context and choice in ethnic allegiance: A theoretical framework and Caribbean case study.
- In N. Glazer & D.P. Moynihan(Eds.), *Ethnicity -theory and experience-*. Harvard University Press. Pp. 305—349.
- 佐々木裕康 1991 外国人留学生の就職—早稲田大学における状況の変化について— 外国人留学生問題研究会会報, **63**, 9—11.
- Shibutani, T., & Kwan, K.M. 1965 *Ethnic stratification : A comparative approach*. New York ; Macmillan.
- 平 直樹・川本ひとみ・慎 栄根・中村俊哉 1995 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて 教育心理学研究, **43**, 380—391.
- 平 直樹・山崎瑞紀・中村俊哉・横山 剛 1995 アジア系就学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割(1)～(3) 社会心理学会第36回大会発表論文集, 232—243.
- van den Berghe, P.L. 1976 Ethnic pluralism in industrial society : A special case?, *Ethnicity*, **3**, 242—255.
- 山崎瑞紀 1993 アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究 心理学研究, **64**, 215—223.
- 山崎瑞紀 1994 アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討 教育心理学研究, **42**, 442—447.
- 山崎瑞紀 1996 アジア出身の留学生及び就学生の日本観 学術研究—教育心理学編—(早稲田大学教育学部), **44**, 41—49.

謝 辞

本論文作成にあたり御指導いただきました早稲田大学教育学部教授の橋本仁司先生、本研究の計画段階において貴重なコメントを下された異文化教育研究センターの川本ひとみ先生に心より感謝致します。また、調査に御協力くださった大学の留学生担当部の方々、学生の皆様に深く感謝申し上げます。

(1996.5.28受稿, 11.21受理)